

エー
A
ジー
AG
ファイブ
5
だより

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

クレメンティ校発。IBの要素を取り入れたESDによる探究的な学びを目指して～シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校の実践より～

シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校教員 鈴木輝英・鬼塚晶子

シンガポール日本人学校は、創立54年目を迎えます。開校当時28名で始まった本校は、現在小学部2校（クレメンティ校・チャンギ校）、中学部1校（ウエストコースト校）の計3校、児童生徒数約2000名からなる大規模校へと発展し、在外教育施設では世界有数の規模を誇ります。日本全国から集う児童生徒、国際結婚家庭の児童生徒が1つ屋根の下で学ぶ、多様性に富んだ国際色豊かな学校です。



鈴木輝英氏



鬼塚晶子氏

小学部「探究科基礎」スタート
クレメンティ校の課題

小学部では、現地指導者による英会話（英語科工）やイマージョン音楽・水泳などの英語教育をはじめ、現地校との交流も盛んに行い、現地理解教育にも力を入れています。さらに、四年生以上にChromebook（ノートパソコン）を一人一台割り当て、EV3やMESHを活用したプログラミング教育など、充実したICT環境を生かした実践も行っています。従来の総合的な学習の時間では、「シンガポール」という国・地域を題材として、校外学習や調べ学習を行ってきました。現地理解教育という点においては、本校の特色ある実践となっていました。

この総合的な学習の時間を見直すきっかけとなったのが、二〇一八年度策定・施行の「シンガポール日本人学校グローバル人材育成大綱」でした。重点課題の一つに「持続可能な社会を実現するための探究力の育成」を掲げ、総合的な学習の時間を中学部では「探究科」、小学部では「探究科基礎」と称し、現地理解教育とおして探究力を身に付けていくこととしました。また、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点や

価値観を取り入れることによる探究的な学びを推進していく運びとなりました。

しかし名称が変わっても実際の実践内容は従来そのまま、シンガポールという恵まれた環境を生かした「グローバル人材の育成」が探究科基礎において十分ではない本校の課題が見えてきました。

この課題と向き合っていくために、在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業である「AG5」にお力添えをいただくことにしました。

研究のスタート
全教員で創造していく校内研究

一九年度、クレメンティ校は、探究科基礎を校内研究の中心に据え、「主体的に学び、よりよい考えを生み出す児童の育成を目指して」というテーマのもと、研究をスタートさせました。シンガポールという地の利を生かしたESDの単元開発と同時に、AG5拠点校に指定された利を生かしたIB（国際バカロレア）の要素を取り入れた探究的な学びを目指すことにしました。

在外教育施設においては、教職員の出入りが激しく、研究の積み上げや継続が難しい現状があります。全職員でESDやIBの理論を理解し

ながら実践を積み上げつつ、本校独自のカリキュラム作りを目指していくには時間が必要だと考え、本研究を二か年計画としました。そして、一年目を「学習の年」、二年目を「検証の年」と位置付けました。

研究一年目の前半は、校内で自己研修会を開き、ESDの理論や実践例を学び合いました。そして探究科基礎部会を中心に、従来実践してきたカリキュラムをESDの視点で見直し、各学年で検討を重ねました。

ESDの研究授業は年間三本行い、授業後の研究会では、ESDに対する知識や実践方法などを深めていきました。そのような研修や授業参観を重ねていくうちに、協議に深まりが見られるようになりました。

「AG5」から学んだIBの
要素を取り入れた探究的な学び

一九年十月、海外子女教育振興財団教育相談室の植野美穂室長と東京学芸大学附属大泉小学校の細井宏一副校長が来校され、「IBの理念を取り入れた探究的な学び」についての研修会が行われました。その中でIBの基本的な理念とカリキュラム作りの考え方などについてご示唆いただきました。また本校より二名の教員が日本のPYP（IB初等教育

プログラム)の認定校を視察し、ユニット(単元)や授業、カリキュラム作りについて学びました。「百聞は一見にしかず」、この成果が、本校の研究を大きく前進させました。

視察後、研究部と探究科基礎部会のメンバーを中心とした「プロジェクトチーム」を発足させ、AG5事業における研修会や視察の成果をまとめました。そして、次の二点を本校の探究科基礎に取り入れることにしました。

①セントラルアイデア(児童に身に付けさせたい価値観)を中心に据えたカリキュラム作り。
②キーコンセプト(物事を見る視点)を活用した授業作り。

一年目最後の研究授業を行う第四学年の実践には、以上の二点を盛り込み、本校が目指す「1Bの要素を取り入れた探究科基礎」の形を提案しました。

第四学年の実践 「すくえ! シンガポールの危機」

1. はじめに
第四学年の探究科基礎では、環境をテーマにESDの単元を開発し、実践しました。

今日のシンガポールは、ごみの急激な増加、衛生面を考慮した使い捨

てプラスチック容器の大量使用、低iriサイクル率、ホーカー(屋台村)やホテルなどの膨大なフードロスなどの廃棄物問題を抱えています。日本よりはるかに小さな国土であるにも関わらず、ごみの総排出量は日本の総排出量と変わらず、更に年々増え続けています。沖合三〇キロメートルにあるごみの埋め立て地であるセマカウ島は、三〇年には埋め立てることができず敷地がなくなり、閉鎖するとも言われています。

廃棄物問題はシンガポールが持続可能な社会を目指していく上で、避けては通れない環境問題です。これを切り口に本単元を進めてきました。

2. 課題への気付き

本単元の導入では、「シンガポールは本当にきれいな街なのだろうか」というテーマで討論を行いました。「空港や中心市街地など、人が集まるところは整備されていて、ごみも見当たらないのできれいな街である」と、児童は考えました。一方で、「ごみの分別をせず、セマカウ島に埋め立てているので、きれいな街ではない」という考えも出ました。児童は、シンガポールに住んでいる経験や、社会科の学習を手掛かりに考えている様子でした。

討論の後、「十年後もきれいな街

でいられるのだろうか」と問うと、「このままではごみだらけになる」「何とかしなければならぬ」と、自

分事として捉える姿が見られました。児童はシンガポールの現状が本当にそうであるのかを自分の目で確かめるべく、環境問題の調査に取り掛かりました。学校では、ごみ箱を全てひっくり返して、ごみの量を調べ、一年分のゴミの量を想定していま

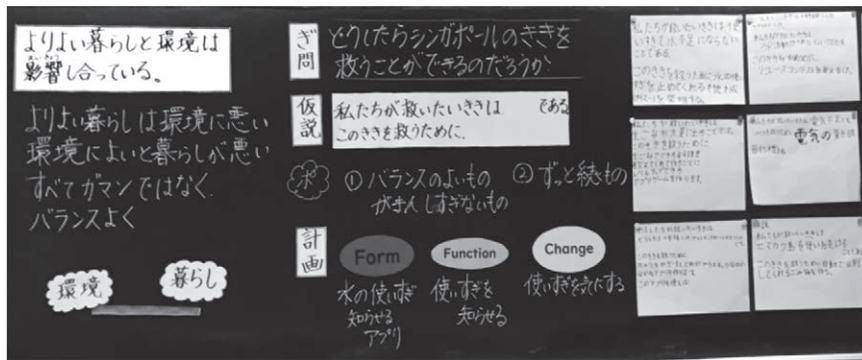
た。一番多いごみの種類も確認し、どれも削減可能であることに気がきました。またシンガポールの街調査では、電気の無駄遣いやホーカーでの食べ残し、プラスチックの大量使用などにも気付き、環境問題を捉える視点を広げていました。

とにかたく皆さんの情報を得たい児童は、ジェスチャー交じりの英語を駆使しながらインタビューしていました。あるグループでは、どのような食器で食事が出てくるかを調査していました。持ち帰る人と食べていく人に分かれて食事を注文し、比較していました。また別のグループでは、飲み物を購入する際はプラスチックのコップではなく、「持ってきた水筒に入れてもらうことはできるのか」と尋ねていました。児童は探究しながらシンガポールの現状を身をもって感じていたようです。

3. 身に付けたい価値観への導き
本単元をおして育てたい価値観は、「環境をよくするのも悪くするのも私たちの生活次第」ということ

でした。この価値観に児童を導くために、調査活動を終え、まとめを行う際、「よりよい暮らしと環境は影響し合っている」というセントラルアイデアについて話し合う時間を設定しました。

児童は、このセントラルアイデアを手掛かりに話し合うことをおし、ダストシューター(分別せずに家の中から直接ごみを放り込める設備)がある便利な生活や、エアコンのつけっ放しなどの快適な生活が環境に悪影響を与えていることに気がきました。更に、反対に体調を崩してまでエアコンをつけたくない、電灯を点けずに暗闇で生活するなど、環境のことはかり考えて自分たちが我慢し過ぎることは持続可能な社会には繋がらないことにも気付いたのです。視察したPYP認定校では、小学生の発達段階においては難易度の高い言葉が並べられ、抽象度が高い表現でセントラルアイデアが設定されていました。しかし本校では研究一年目ということもあり、学習の過程で、児童がある程度捉えやすく、自分の考えを持ちやすい表現であること



研究授業の板書

がセントラルアイデアとして望ましいと考え、「よりよい暮らしと環境は影響し合っている」としました。また、それを言葉だけでなく、図式化して表しました(板書の左下)。シーンを示して「暮らし」と「環境」の関係性について話し合う

と、どちらかに傾くのではなく、両者のバランスが取れた解決策を考えていかなければならないことに、児童は気付きました。

4. より深い学びへ

その後、グループごとに分かれて、持続可能な社会の実現に向けたアイデアを考える活動を行いました。

活動する際、今回は「Form(形態)」「Function(機能)」「Change(変化)」の三つのキーワード(板書の中央下)を用いて考えさせました。例えば、「自動的にごみを分別する装置を作ったら、分別が徹底してできる未来になるかもしれないが、ごみに対する人の意識は変わらない」と発言した児童がいました。この児童は、「Change」というキーワードを使って、自分のアイデアを分析していました。

児童が自分たちのアイデアをキーワードを用いて様々な角度から分析し、話し合ったことで、学びは一層深まりのあるものとなりました。

5. 発信する児童の姿

本単元の終盤では、シンガポールを救うことはもちろんのこと、世界の環境問題も解決できるような「自動的にごみを分別する装置を作る」「生ごみレシビを考えてネット投稿する」などの画期的なアイデアが考

えられていました。

自分たちのアイデアを発信する際には、「SDGs(持続可能な開発目標)のターゲットロゴを入れたい」という声が上がりました。それは具体的に世界のどんな危機を救うアイデアなのかを、見た人に一目で分かってもらいたいという児童の思いからです。中には、自分たちで考えた危機を救う発明品を模型にして発信する姿がありました。また自分たちのアイデアを実践し、確かめる姿もありました。最後の「アイデア投票」では、より多くの人に伝えるために、全校児童や教職員に「これならシンガポールが救える」というアイデアへ投票してもらいました。「ぜひ、見に来て投票してください!」と、呼びかける児童の姿もありました。

6. おわりに

「シンガポールにある。本校の利点を生かしたグローバル人材の育成はどうあるべきか」という課題に立ち向かうため、セントラルアイデアとキーワードを取り入れた実践を行ってきました。これとおして、世界的な諸問題に対してグローバルな視点で考え、実践しようとする児童の姿が見られるようになりました。しかし、セントラルアイデアとキーワードの有効な活用法や活用

場面については、今後更に検討していく必要があると感じています。

今後の展望・研究二年目に向けて

第四学年の実践ではこれまでの研究の積み上げが形となり、今後の方向性が定まりました。また年度末に、セントラルアイデアを中心に据えたカリキュラムを再構成しました。研究二年目では、一年目で練り上げた「1Bの要素を取り入れたESDによる探究的な学び」に磨きをかけ、より確かな成果を上げていけるよう研究に邁進していきます。そして、「クレメンティ校発」の探究的な学びの実践を目指していきます。



すぐに取り組めるアクションとして児童が考えた「アイデア投票」、多くの人が行き来する階段の踊り場に設置し、全校に向けて発信した。